



函齋道中記

伊地知文庫  
文庫20  
422





新記行出太閤記第十卷

元文六年二月中旬抄出之

五七五

顔於  
七十二



出奔道之記

伊地知氏書冊



今茲天正十五二月の初博隆叙下九州大友嶋洋々  
 ころの針指とてめぐるすまの如し進教之事を  
 息与市郎曰言番元系陣之上家とのれ道と  
 方なれは世奉の事めをるわいとて居らるは陣  
 の道といつゝは在國を定むるなりて心地で四月十  
 九日にあはれ能形致してはては日回とて出て  
 一日の文津よりまらた二日ひけ城本舎より出て  
 ぬるは出川流あをせしゝゝありて終り晴間



なごり〜ハル井子の禪心といふて格あ〜盛ん  
く出て舞〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く  
晴〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く  
け〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

必のたののり〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

軍書に欲必則莫令問軍吉山とあま〜く  
す〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く  
船〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く  
下〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

保〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く



かきこひてかたみかたのこころをたのむ  
今もあはれをこころに

あはれをこころにたのむ

かきこひてかたみかたのこころをたのむ

かきこひてかたみかたのこころをたのむ

かきこひてかたみかたのこころをたのむ

かきこひてかたみかたのこころをたのむ

かきこひてかたみかたのこころをたのむ

かきこひてかたみかたのこころをたのむ

かきこひてかたみかたのこころをたのむ

かきこひてかたみかたのこころをたのむ

かきこひてかたみかたのこころをたのむ

かきこひてかたみかたのこころをたのむ

かきこひてかたみかたのこころをたのむ

まりぬ

千早振神乃年一海や天地と

つらちちめつる 國のみち

かきこひてかたみかたのこころをたのむ

かきこひてかたみかたのこころをたのむ







素多蓋為專到出雲國初有二十一首  
あまてし〜教とよはらけとよひ〜  
云はけりよあ目あし〜  
けりふ家あま〜  
より教のあまを〜

卯花や井のいづのいづ〜

今に書や〜  
よて連歌〜  
〜船の〜

今不難が〜  
あ〜  
ら〜

郭らあ〜

九九回〜  
同〜  
た〜  
〜

お花や〜



らんんのしころあしきちの風  
世身よりやうて銀山(山)してつるふかき山  
城を市の上よるさるとん

城のまもりしころあしきちの風  
らんんのしころあしきちの風

やうりける道母寺の元白の庭かしのさ  
深山木の中ぬ夏とやわかえて

温泉は津まて出く信院よりけり  
東歌く一卷をんせし事かしのさ

五月二日夜句あるしころあしきちの風  
けりぬ

浪のさかすしころあしきちの風

五日おすしころあしきちの風  
あるしころあしきちの風

しころあしきちの風

七日濱田とあしきちの風  
石見のたけのねのあつり  
あるしころあしきちの風

幸田のしころあしきちの風



うづらぶせいも海あはれぬる事

くちをきつりのねしゝのいさ

こころして長門(國)よこち坂の上登くとる後  
てしよかり海とよぶとさう港も世のまき事なる  
事と思ひをせし

みづのいぢらぶらうきとの先とを

せきかりし水は流中らうた

にがし國浦小畑と云はる唐船乃てさよ  
と船人のらよおしけし海はふも世のまき事

舟成をききんくちのめ

我も海いしういさしてはれぬ

りりし船乃よりし漆

あこのい波のまきんくち

小はるんはまきんくちあはれん

しつゝたうあこのい波

十日瀬戸海とよぶと船せしは海わらうと波  
すし船とをいしゆらるりし百果たるまき事  
しらたうらうとまき事しる家神あはれしは







たついでいふまに前より進みし物も今も彼の時より  
よわらふもさしあつてもさういふまにまゝに  
いふれどもさういふ物なり

ちしきしきあつていふまに  
馬きしきいふ人のいふん

豊浦宮よりいふまに

水もさぬ池のさうらの物なり

いふまにれまははははははは

関原よりいふまに阿比留寺に集り物もさぬの物なり

に寺よりいふ人の内裏ともいふつて物もさぬ  
いふまに安徳天皇御時より平家一門の物も  
さぬ物もさぬ物もさぬ今この物もさぬ  
いふまに人のいふまに物もさぬ

いふまに物もさぬ物もさぬ

いふまに物もさぬ物もさぬ

いふまに物もさぬ物もさぬ

いふまに物もさぬ物もさぬ

いふまに物もさぬ物もさぬ



兵糧船のけしきいふとてふはれは東の  
舟船を國よりそとるなり  
あけこもはしむるはれは東

豊前之柳浦をさるとて女舟をせし  
を國をよくらとて半苗なり

日月を言未回寄と出くしきふ雨のそ残とて波  
舟のあはれなよ小舟のまはるるはれは東  
舟もそいして船が箱船とてしはれは人のそ見  
余りはあはれし若鐘と求め船のそまはるるはれは東

女てねおとて今よとて目如のよはれは東  
ふとんひるよりとて船の勅撰名亭よ、金とて字  
と書くはれは東(けしき)はれは東(な)はれは東  
に海にけしきふはれは東(な)はれは東(な)はれは東  
はれは東(な)はれは東(な)はれは東(な)はれは東  
そとるはれは東(な)はれは東(な)はれは東(な)はれは東

そとるはれは東(な)はれは東(な)はれは東(な)はれは東  
はれは東(な)はれは東(な)はれは東(な)はれは東(な)はれは東  
はれは東(な)はれは東(な)はれは東(な)はれは東(な)はれは東  
はれは東(な)はれは東(な)はれは東(な)はれは東(な)はれは東



春日麻鳩神社おちおちいけりけり

二つに山けりてやかのまじりの一徳

社のちちいりてそなたけしは

縁起あとしり出でんせしつゝ

彼れをいづかのついでに

ゆかりついでの中なるしは由社のは新く由社傳の活

られける又香椎の神社より出たりはことごとく

うらなひとまき出んあけりし砂のきりて

海中とまけりて出づるはしついでに

とんくまらり文珠をまじりしを、橋立の事なり

ゆきまき當社の安んず候良れとまき社に

國邊の所新くまきりて兵形構なりし海

とせし神也志しりて

名ふしおの龍の宮にのりて

波とまけりて中道

けあきとまきりてたむけりてのりて

いふちりてるふれりてははははは

まきりて戒定惠の三博士の箱とまきりて

まきりてのりてちあきとまきりて



うしろくよおひをなびけるるるる

はくそふ代中さうしあちけり

日さしくゆけき精ぬるよゆりるに安と袖

の漆と里人のきーくれし

いほら精いもいにぬるるんこを衣

社の女をたなまのまうくに

日まられ想いふ船よせし福りん

いーごいのよ六袖から漆を

古六回定年府を天神に候ひしあさ及し

為るんね海うりけは夜宮寺七と登くかりり

上してかこ斗りり敷あると鷹沈のよ松松の

かくきうしるにほせさふあいのさうしゆき山

そゆるる右の方七河くかりもさうらんて

寺の室に西都とまふゆれ下也能梅古本を焼て

きりけるにさるるえの生おてさうて

鳥乃くみんげんをさうきさゆ毒乃

うこよはいさうてのさうまふらん

くしあ深いさ里人さうてさういゆら



いづれもふじのあはれに流すたけも流る

さ乃波むしーまかき深川

うよたろそふあろそりりえ

思ひ川せ

くろく秋乃堂やまろし四り川

あかこえめちちゆあるぬかろるの雲の流とど

くじりよと波陣直名の流きくかたろし事るま

しとほし之年

えりり路をぬるなりくさ池と陣より

昔根あやのりやあつせに

は流るあは山にくさ葉にきくあつせりりこの存るま

山とそをんまは若電山室重寺とく山伏の信る

はよ有きとそりり年信りりち程とそ者城柳より

くろまけるま年流津出あつせりりまの塚あ庭

せ財あけよらけは山伏の信にせしちりぬを流

まはかりてんまは

まはかりてんまは

まはかりてんまは



下也山ありて

志けをりる乃山きよ入鹿を

林より病よぬまそいさむむ

姪濱より今乃安利脇指をこそ目利て銘をま  
能得たりいふも成言こいふあわとの近事ぬ

わたりし乃代もいふすよめ

るりこいこいさめいのたまうれ

た八日姫濱とこいふよりうらなちをばあふまがら

すーいば成のきよよりぬまこいこい

といくりあつていふはまらうら

姪濱より今乃安利脇指をこそ目利て銘をま

能得たりいふも成言こいふあわとの近事ぬ

わたりし乃代もいふすよめ

るりこいこいさめいのたまうれ

た八日姫濱とこいふよりうらなちをばあふまがら

すーいば成のきよよりぬまこいこい

といくりあつていふはまらうら

姪濱より今乃安利脇指をこそ目利て銘をま



風のゆる南とすしのたふらぬ

社同六月梅

月八日利休居士園白敷渡津松いさく夜打と云  
おぼろそ敷白はゆいさゆあはる暮路入禰の心や

祢代のももえはく涼一松の風

ちきりりりことさ夏のねる月 松

はのつしもあはくらの雨晴く 白舟 松

箱崎の八幡のしら園白敷おのりあはる音あせ  
よまられおよせくはきこよぬせきまけりふ

は夕れとあはるあはるあはるの

春のこの路も君の付の友

園白敷おぼろの紅葉とすゆのまのりて名を長  
せしきりしは世に因の事とおぼるぬしり海と云  
て清田也と云

立出る袖もらんあはるの夕陽

かきくはるあはるあはる

春をいさかつせのあはるは春に花見田つらふ  
いさくまづのしよあはる



松のうねりかきくさのあざむき

~~~~~

六月廿日あづきの原ふき椎の浦へはらうて

~~~~~

若椎のわたりはらうて

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

對馬舟渡京對州のけう一首道はて後白雲を  
みよとよくお船のよし傳のいて曲地事なを傳はけ。

~~~~~

~~~~~

卒因和歌韻

始識逢君情所鐘 向來相物對閑宮

帝都門外莫言遠 千里回風一樹松

~~~~~

~~~~~



後白

こゝろのまよひなくんむねのまよひなき

六月廿一日打てはるる海に大炊をあらま

浪のまを妹国ちりー西走海

あはれはるるのすまゐるあはれ

こゝろのまよひなくんむねのまよひなき

と千宗易はるるまよひなき

はるるまよひなくんむねのまよひなき

こゝろのまよひなくんむねのまよひなき

廿七日白敷花海あまこゝろのまよひなくんむねのまよひなき  
うらるる海に敷やう俄に打殺して後白は  
まよひなくんむねのまよひなき

長草一り花の香るす被る

すーさあまはるるの月 12

まよひのまよひなくんむねのまよひなき 由己

七月廿四日白敷花の香るす海に大炊をあらま

かゝる馬をあらし船は南の海とあらま

あまのまよひなくんむねのまよひなき 出船



這處一坊りて田いほにけり

秋といふは秋の候とありぬ

六百の舟の出るは因幡の物事の行  
とら馬のちかておあまの業をせむとありぬ  
と疾せぬあつて思ひかへつ方のわかれ  
七ヶもの舟の袖にけりありぬ

やあまのちかて孫のちかありぬ

八百の舟のちかて國の天神の立出にありぬ  
とてはあまの國の信持書因幡のちかありぬ

この舟のちかて七日の這處一

九日一

ちかてありぬ

十日出ると國の天神のちかありぬ  
正しにのちかて孫のちかありぬ  
樂坊のちかありぬ  
あいのちかありぬ  
時をちかありぬ  
父のちかありぬ







新しき月やいふ六世の次

高田は桐守建の奥にもおのれはあはれおのれはあはれ  
おのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれ  
おのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれ

秋半しとてまはるる

おのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれ  
おのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれ  
おのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれ  
おのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれ

おのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれ  
おのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれ  
おのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれ  
おのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれ

おのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれ

おのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれ  
おのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれ  
おのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれ  
おのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれおのれはあはれ



船と船をいふのうらやまのうらやまのうらやま

のうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

のうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

のうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

のうらやまのうらやま

のうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

のうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

十九日後のうらやまのうらやまのうらやま

のうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

ありとせしむる船のうらやまのうらやまのうらやま

船のうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

のうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

其のうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

船のうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

のうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

風のうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

はなはたうらやまのうらやま

夕儀のうらやまのうらやまのうらやまのうらやま



















